

八月の記憶

大庭みな子

今年で五十七回目の「終戦記念日」を迎える。昨年も「八月忌」をこの日記に書いたのは承知しているが、そろそろこの連載を終わるにあたってもう一度書かねばと思うのは私の宿世ともいえるので敢えて書く。

「終戦」というおかしな言葉もそのまま使われて変わらなかったが、日本の国そのものも変わったようで変わらない毎日が続いている。というよりは消し去ったはずの亡霊のようなものが次々に復活、蘇生しているようだ。

「終戦」という言葉は「敗戦」ということを潔しとしなかった人たちの智恵だと解釈されるのだが、皮肉にも私たちにとってもそれは「終戦」だった。天皇の放送を聞いて家路を辿るとき、「敗けた」という思いよりも「終わった」という安堵の思いがはるかに強くて嬉しかったのを憶えている。やれやれという解放された感じの方が強かったとトシも言っている。何もない焼け跡、砂漠のような状況に投げ出された一種の

解放感だった。

それなのに今はまた当時には予測もされなかった逼塞感に見舞われている。非戦の誓いなどこへやら、有事法制などというのが大手を振って歩いている。最高裁の判事らは憲法第九条についての解釈は恥ずかしげもなく逃げて回っているだけで、選良なる集団が自分の都合で海外派兵も合憲などというのに目をつぶっている。アメリカに尻尾を振って、イラクに核を落としても構わないと言いかねない政府が大きな顔をして日本の安全はなどと騒いでいる。

戦いを止めたといわれ

幸せを

噛みしめた月、八月は

あの青空にきのこと雲

見て脅えた日から

半世紀

慰霊の月と手を合わせ

今に脅えるこの世界

希望とはこんなものかと知りそめし 国破れたる夏の青空

世界一の大国アメリカは自分以外の国が核兵器を造っているのではないかと常に脅えているが、核を一番使いそうなのはアメリカだと世界の人は脅えている。いずれにしてもこの半世紀あまりを、私たちは核、核と脅えつづけてこの八月を繰り返して迎えた。

八月の青空はきこの雲を甦らせる。それと共に戦争が終わった日の幸せを甦らせる。幸せを噛みしめた日が八月の思い出でもある。物心ついて以来戦争をしていないということの意味を長い間私は知らなかった。幸せとはいったいどんなものか、味わったことのない私は知らなかった。繰り返し繰り返し八月の青空の太陽は私にそれらの情景を思い出させる。

カク、カクとカクに脅えて 半世紀

我らの智慧の愚かなるさま

人間の世界は後五百年だと言う人もいる。いや百年もないかも知れ

ぬ。核を造りロボットを造り、人間は賢くなったといえるのか愚かになったというべきだろうか。八月には戦争にまつわること以外は何も浮かばない。両親の命日のように今年も八月がここにある。

毎日のニュースに殺人事件がないことは一日もない今日このごろだが、少女のときも、毎日のニュースは戦況の報道ばかりだった。現代の殺人とどう違うのだろうか。あの時も毎日毎日大量殺人が繰り返されてきた。そう、あのころから私はニュースに関心がなくなり、異様な疑念を持つようになったのだ。このニュースはいつたい本当のことだろうか、何を意味しているのだろうか、乙女の素直さは失せてしまった。

そして、突然あのヒロシマの爆心地で、血海の中に「水う、水う」とうめきながら死んでいった人たちの思い浮かべながら今ここで水を飲んでる。この水はもしかしたら末期の水ではないか。私の身体には蛆虫が這ってはいはしまいかと手足を動かしてみたりする。大きく長く膨れ上がった黒焦げの死体、ばらばらな白い骨の散らばる瓦礫の街、自分がいた家を探し回る復員兵の姿、 私たち女学生が毎日炊いていた救援のた

めの雑炊、その雑炊を配り終わった後の鉄鍋にあつという間に群がって、ガリガリと音を立て鍋の底に焦げ付いた雑炊を持って行く被爆者たち。その人たちの身体にはまぶたにも唇にも蛆虫が這っていた。八月の明るい青空の下の風景だった。

八月がやってくるのとそれらの情景がそこら中に貼り付いて私は自分の手の指を広げて蛆虫がいはいかど確かめる。蛆虫がないことは夢かもしれない。あの情景が夢ではなかったと同じように、いまの私がここにあることが夢かもしれないのだから、人類はあと百年後にはいないのも夢ではないかも知れない。

非常に美しい青空と真夏の太陽が八月には必ずある。同時に蛆虫と白骨と青蠅がある。私の八月の情景からそれらを取り除くことは決してできない。同じことばかり言っている、といわれても同じことばかり繰り返す以外に言葉がない。

五十七年月日はすべてを風化させ、そろそろ核武装をしようかなどという世代の政治家も登場する。長く生きてしまうと、創った物は壊さずにはいられない人間の深い深い業を見ないでは済まされないようだ。そ

の意味でも長生きは幸せとは言えないようだ。

八月が巡ってくるたびに私は十四歳の夏ヒロシマで見た被爆者たちのさまを、血と蛆虫と青蠅と共に甦らせる。私の働いた場所は原爆ドームのすぐ対岸の本川小学校の焼け跡だった。夜になると白骨の散らばる校庭でどういうわけかコオロギの鳴く声がして驚いたものだ。原爆投下のときにはまだ土の中にいたのだろうか。

被爆者の うごめく中で こおろぎの 声に怯えし 十四の夏

浦安はディズニーの街だ。十四の娘たちはミッキーのキャラクターを求めて集い、喜声を上げ、夜の花火の爆発音に酔いしれる。六十年前の「鬼畜」は今最大の「友人」というよりは「主人」である。浦安の花火は明日はイラクの上の業火かもしれない。この半世紀はいつたい何だったのだろう。

江田島

大庭みな子

五月末、六十年前にナコが過ごした江田島の小学校の同窓会に出席する。いろいろな人の好意に甘えて、車椅子は空を飛んで広島空港へ。

紀元二千六百年と日本中が浮かれていたその年の前後、ナコは父が海軍軍医として勤務した江田島海軍兵学校の敷地内にある従道小学校という特殊な学校で過ごした。

戦後すぐに廃校となり、以後新しい卒業生は生れず、六十を過ぎた年古るばかりの同窓生だけに余計懐旧の情が深いのだろう、いつも集まりがよい。

海軍という特権に守られた、恵まれた環境の小学生時代は楽しい思い出でもあるが、やがて襲う原爆の地獄を見せつけられた思い出と重なって、目をつぶって通り抜きたい地でもある。

被爆直後広島駅から見た市街は焼け野原、瀬戸内の海にある富士のよ

うな小島、似島がすぐそこに見えたのに、今日は立ち上がったビルの林の蔭に消えている。鯉城が再建され、道には車が溢れている。戦後はいつまでも戦後であってほしいが、ふとこれはこれから始まる戦の前のひと時ではないかという不安も走る。

広島をヒロシマに変えし核の痕不戦の誓いと共に褪せゆく

山はさけ海はあせたる世となりて君に二心あるを吾は知りたり

水、水とうめく声消えず五十年の醒めて見し地獄にまさる地獄

なし

ナコたち女学生が任された生き地獄の中での配膳の仕事は夢多しといわれる思春期の乙女にとって刺青以上に消しがたい刻印だった。毎日のように「水を、水を」とうめいて息を引きとっていった被爆者の声は、以後消えることなくフーガのように繰り返すナコのBGMだ。

十四の乙女をさんさんに弄んだヒロシマをぬけて、小学校時代の幼い春を楽しんだ江田島に向かう。ナコが小学校三年、四年を過ごした土地

だ。古鷹山の麓は桜、菜の花が海の青に映え、小川には蟹が這い、水晶の山には輝く石が散っていた。でも、それは紀元二千六百年と謳い、日本人一億が「朝日に匂う山桜花」との言葉に踊らされていた時代だった。十歳のナコには海軍士官の卵の生徒さんもまた素敵な姿に映って、親たちの暮らしを脅かしていた危惧や怯えは伝わってこない、知らぬが仏のひとつの幸福であった。

六十一年ぶりに顔を合わせた先生との対面はただただ二人のハンカチを濡らすばかりだった。

「当時から縮れたままのミナちゃんの髪の毛を覚えています」と言われるが、もう先生の手にはぶら下がって遊ぶわけにはゆかない。二十年ほど前に夫君を亡くされたが「私もみな子さんと同じで、今度結婚するとしたら同じ人と結婚するわ」と言われるから、先生も幸せな結婚生活を送ったのだろうと安心する。

旧海軍兵学校の見学は幼いころの記憶を確認させるものもかなり残っている。それでも一番懐かしいのは今も背後に立っている古鷹山の姿だった。江田島で暮らした人は皆登ったに違いない山だ。車椅子では登れ

ないがナコも小学校のときには何回も登った山だ。幼馴染のHさんは仲間と一緒に明日は登るのだと張り切っている。古稀を過ぎた人々も誘う懐かしさがある「故郷の山」に違いない。

だが、懐かしい江田島も教育参考館という建物のところで暗転する。何とそこには爆薬と共に生身の人間を詰めて敵艦に発射されて海に沈んだ特殊潜航艇が雨に濡れてかざられている。「人間魚雷」という忌まわしい言葉が甦る。

説明によれば「憂国の若者が国難に当たるために身を捧げる」ために造られた特殊兵器なのだ。Hさんは言った「私の兄は海兵を出て間もなく戦死しましたが、そんな単純な気持ちで死んだとは思いたくありません」。

最新兵器のはらわたは冷たい黒い鉄の塊。一番安価な血肉のある人間が黒い鋼のひつぎの片隅に押し込められて撃ち出される。出陣の祝宴は処刑の合図。身を捧げた大君は、「撃ちてしまわむ」の敵の総大将とにこやかに握手して並んで写真におさまる。そして、鬼畜のはずのアメリカは今では逆らってはいけない、日本を守ってくれる神様なのだ。

若者を魚雷につめて撃ちし人は天にあるかと足の震えるうじし
うらみ蛇のうろこか人の脳企むものは生き物の糞闘いをいそと
せ過ぎてここになお飾る魚雷に何を語らす

わが夫になりしやも知れぬ若者よ

われここに参りて舞うは恨みの舞か

涙あふるる齒きしりの中

「ヒロシマ」は幼いころの「広島」に戻ってくれるかとも思った懐旧
の旅のつもりが、ますます怨念の黒い影の立ち上る「ヒロシマ」になっ
てしまった

江田島は春の雨降り黒い影煙の中にむせびて消えよ